

セッションNo.4の発表に対するコメント

野口圭也

はじめに

二〇一七年度の日本佛教学会第第八十七回学術大会は、二年間の共同研究テーマ「人間とは何か 人間定義の新たな次元へ」、本年度のサブテーマ「仏教から見ると「人間」定義の新たな次元」と、開催された。筆者がコメントーターを務めたのは、大会一日目のセッションNo.4である。本稿では、当日の発表に対する簡単なコメント、および筆者からの質問への発表者からの回答を中心に報告することとしたい。なお本稿は大会当日の会場における録音をもとに執筆したものであるが、文章化に当たり多少の改変を加えている。本稿中に発表者の発言内容についての過誤がある場合は、その責は筆者に帰せられることは言うまでもない。

本セッションで発表を行った諸氏と、発表題目は発表順に以下の通りである。

佐久間留理子氏（名古屋大学）「密教図像と宗教実践にみる人間存在の諸相」

スタン・シヤキヤ氏（種智院大学）「ネパール仏教におけるヴラタ（vrata）について」

奥山直司氏（高野山大学）「密教における人間存在」

発表題目を見れば容易に判る通り、本セッションは、密教、それもインド密教とその直接の発展形態であるネ

パールおよびチベットの密教を主題としている。発表された各氏は、いずれも筆者と同じくインド密教を専門分野とする研究者であり、旧知の間柄である。

本セッションの直前に行われたセッションNo.3は、龍谷大学ならびに佛教大学の先生が発表を担当された、浄土教思想を主題とするものであった。ここでは浄土真宗また浄土宗における人間観についての議論がなされたのだが、阿弥陀仏と衆生との隔絶、あるいは極楽浄土を別の世界に設けるといったような、浄土教の思想が取り上げられていた。

それに対して、このセッションで扱う密教では、奥山氏の発表に典型的に示されていたように、「人間即仏」の人間観というものがあリ、また、佐久間氏・スダン氏の発表で紹介された通り、曼荼羅という、浄土の一種とも言える聖なる場をこの現実世界の中に出現させるというような儀礼が日常的に行われている。

このように、浄土教と密教とが続いて一つの場でもって議論されるようなことは、ほかの学会ではめったに見られないことと思われる。日本印度学仏教学会でも、このようなテーマは恐らく全く別の部会に配当されるであろう。したがって、今回のこのセッションの連続は極めて貴重な機会であったのではないかと、両セッションの発表を聞いて大いに感じたところである。複数の部会に分けず、専門を異にする研究者が一堂に会して、あらゆる分野の仏教に関する議論を参加者全員が共有する、という日本佛教学会の現在の学術大会のあり方が持っている大きな意義と言えるだろう。

一、佐久間留理子氏の発表「密教図像と宗教実践にみる人間存在の諸相」、および
スダン・シャキャ氏の発表「ネパール仏教におけるヴラタ (vrata)」について

先に発表されたお二人は、現在もネパールで盛んに行われているネパール仏教の密教儀礼について、現地での調

査の報告も含めての発表内容であった。佐久間氏は、ネパールを何度も訪れて現地において実際に密教儀礼の調査を行い、かつ文献研究も進めてこられた。この発表は、その成果の一端である。スタン・シャキヤ氏はネパール出身なので、自分の故郷の宗教についての発表である。両発表とも自身のフィールドワークに基づいていることが大きな特色であるが、期せずして両氏とも同じく、ネパール仏教における重要な密教儀礼である「ヴラタ (vrata)」を取り上げ、密教儀礼における人間のあり方を考察された。同じ題材を扱い、内容的にも共通点が多いため、両氏合わせてのコメントとした。なおヴラタ儀礼の具体的な構成については、それぞれの発表で詳しく紹介されているので、本誌に掲載されている両氏それぞれのご論文を参照頂きたい。

今回のテーマの「人間定義」ということに関連して言えば、佐久間氏の発表で述べられたように、ネパールにおいてこのような密教儀礼を行う立場の人間は宗教的エリートであり、カースト的に存在しているヴァジュラチャールヤと呼ばれる人たちがこのような儀礼を司祭として仕切っている。一般信者は、それを在家信者として支える立場になっている。そしてその両者が一堂に会することができる希な機会がヴラタの儀礼であるということが、佐久間氏、スタン氏両方の発表の中で出てきた。

すると、ネパール仏教において重視されているこの儀礼における人間というもののあり方は、片や宗教的エリートとしてのヴァジュラチャールヤ、一方ではそれを支える在家信者として、カースト的に分断されているのか。両者が入れ代わることはないのだろうか。

宗教的エリートたるヴァジュラチャールヤとして宗教的指導に携わる立場の人たちは、カースト的に世襲での立場を継承していくことになると思われるが、例えば一般在家の信者が、自分も同じようなヴァジュラチャールヤのような宗教的な実践を行う者になりたいと考えたときに、そのようなことが可能であるのかどうか。

あるいは逆に、ヴァジュラチャールヤの人たちが、日本で言うならば、還俗ということになるが、自分のそ

の立場を自ら放棄して、一般の在家信者として仏教を支えていく立場になることが可能であるのかどうか。

現在の日本の仏教では、寺院に生まれて寺院に育ち、そして、寺院の後継者となる、というかたちでの宗教指導者が極めて多い。筆者自身も真言宗の寺院に生まれ、現在はその住職を務めており、ちょうどヴァジュラーチャールヤと同じように、在家信者である檀家のリクエストに応じて、護摩を焚いて、檀家の家内安全、病氣平癒を祈願している。

この点から見ると、現在の日本の仏教は、ネパールの仏教と非常に似ている形態とも言えるかと思われるが、そのような立場がカーストとして固定されているわけではない。それに対してネパールではカーストとして固定されているのか。それとも、在家とヴァジュラーチャールヤのような宗教的エリートとの立場が入れ代わることが可能であるのかどうか。両者の交流がヴラタの場で行われるとしても、ヴァジュラーチャールヤになることができる、あるいはヴァジュラーチャールヤをやめることができるのかどうか。

この点はまた両者の日常的な関係性にも係わってくるが、ヴァジュラーチャールヤの立場から見た在家信者というのはどのように意識されているのか。あるいは在家信者から見て、ヴァジュラーチャールヤの人はどのような存在であるのか。以上のように筆者から両氏に尋ねた。

これに対して、まず佐久間氏の回答は以下の様なものであった。

出家カーストであるヴァジュラーチャールヤとシャキヤは、血統で、世襲で決まっている。この仏教徒のカースト化というか世襲化は、十四、十五世紀ぐらいから政治的に行われてきた。十四世紀のネパール王であったジャヤステイティマツラ王の時代にヒンドゥー教化政策が行われ、それ以降仏教徒のカーストとして世襲にしていくなというのが定着してきた、という歴史的な事柄がある。

氏がネパールに行くときによく訪れるヴァジュラーチャールヤの家では、兄弟の一人が儀礼僧としての伝統を

父から世襲として受け継ぐ一方、もう一人は絵師として活躍している例がある。僧侶階級の中には、ヴァジュラーチャールヤとは別にシャキヤというグループがあるが、弟の方はシャキヤの僧侶と同じことをやっている。その程度の変更はあっても、全くのヴァジュラーチャールヤではない、あるいはその階級ではない一般の人が、自分はこのように仏教を勉強したい、この伝統に入りたいからといって中に入るということは、普通は考えられないのではないかと思われる。

また、今回の発表に用いた写真を提供してもらったロータス・リサーチ・センターの講師にスレンドラ・ヴァジュラーチャールヤという先生がいる。彼は、自身はヴァジュラーチャールヤだが、祖父の代までは儀礼をやっていたけれども、父親と彼はそういうことは全くできない。「今度家で儀礼をやるから見に来ないか」と誘われて行ったところ、現在もきちんと儀礼をやっている専門のヴァジュラーチャールヤの人を呼んで、家で儀礼を行っていた。彼自身は全くできない。これは還俗というよりは、実際に行うことを放棄し、ただヴァジュラーチャールヤという名前が残っているということと思われる。

またスタン氏によれば、以下の通りである。

ヴァジュラーチャールヤは一般社会に還俗することができる。ヴァジュラーチャールヤ家系に生まれながら普通の一般市民として、在家仏教徒として生活することは可能だが、その逆に、シャキヤと言われている在家の仏教徒たちがヴァジュラーチャールヤになることは、十四世紀という一つの節目をもつて不可能になった。それまでのネパール仏教では、ヴァジュラーチャールヤはカーストではなくて、日本の真言密教と同じように、灌頂を受けると得られる一つの称号であった。いわゆる「灌頂を得た者」というかたちであった。その名残として、今のヴァジュラーチャールヤたちは、出家して最後に灌頂を受けることが生まれつき義務づけられている。

一方、シャキヤの人たち、すなわちヴァジュラーチャールヤ以外の仏教徒は、シャキヤ系の者として仏教徒になることはできるが、在家だけにとどまり、阿闍梨としての仕事をすることは許されない。

つまり、灌頂を受けることはヴァジュラーチャールヤだけの特権であるが、それ以外の伝授（ディークシャー）、例えばチャクラサンヴァラとか観音とかの個々の尊格の供養をする伝授を受けることは、ヴァジュラーチャールヤとシャキヤ両方に許される宗教的な行為である。

このようにネパールのヴァジュラーチャールヤは、世襲として灌頂は必ず受けるので、それをずっと続けることができる。それに対して、それ以外の仏教徒は、ヴァジュラーチャールヤになることは絶対にあり得ない、というかたちになっている。

またその後、会場から、国家制度も変わった現在のネパールにおけるヴァジュラーチャールヤの現状に関する質問があった。それに対してスタン氏から、現在はヴァジュラーチャールヤの姓は持っていない、実際に宗教行事に取り組んでいる人は非常に少なく、世襲だけでは難しい状況となっているが、改革にはまだ時間がかかるであろうとの答えがあった。

二、奥山直司氏の発表「密教における人間存在」について

奥山氏の発表は、その題名からも窺われるように、会場校でありかつ奥山氏の母校でもある東北大学の教授であった羽田野伯猷博士の論文「Tauric Buddhism における人間存在」（初出『東北大学文学部研究年報』第九号、一九五八年、再掲羽田野伯猷『チベット・インド学集成』第三卷インド篇Ⅰ、法藏館、一九八七年）を中心に、インド密教における人間観を極めて明快に紹介するものであった。羽田野博士のこの論文は、インド後期密教研究史

上極めて重要であり、発表後六十年を経た今日においても、インド密教における人間観を探るには、まず第一に参照すべきものである。

この羽田野博士の論文に端的に示されているように、インド後期密教における人間観は、「その死するや法身、中有は受用身、その生まれるや化身として、仏と不可分一体なる神的存在でなければならない。人間は神に奉仕すべき奴隷ではない。仏に額づくのも、人間が自己自身に額づくことなのである。人間的存在は、神的存在と本質的に円融する（前掲書一六二頁）」というような立場が明確に打ち出されている。

人間としてありながら、かつ仏になることができる存在。そういうものが、密教の儀礼において本尊と一体化するような行を瞑想の中で行っていく。このような人間の立場、行のあり方は、日本の密教にも同じように継承されているという内容の発表であった。

またこのような思想の源流としては、『華嚴經』の如来性起、『宝性論』、『起信論』といった如来藏思想、あるいは本覚思想が想起されて然るべきであろう」と、羽田野博士は述べている（前掲書一六五頁）ことが紹介された。密教思想と如来藏思想については関連性が指摘されることが多いが、インド後期密教においては、インド大乘仏教の伝統を引いている如来藏思想が、どのように継承され、「人間即仏」というような人間観へと展開をしているのか。

筆者自身も関心を持って研究しているテーマであるが、如来藏・本覚思想とこのようなインド後期密教の人間観にはどのような結び付きがあるのか、どのように展開してインド後期密教のこのような思想へとつながっていったのかという点について、奥山氏の考えるところを尋ねた。

それに対して奥山氏は、如来藏・本覚と密教思想をつなぐものとして、菩提心思想の発展を挙げられた。奥山氏の回答は次の様なものである。

菩提心は、初期大乘においては上求菩提・下化衆生という誓願心であったが、『大日経』『住心品』になると、悟りそのもの、悟りの自性の心と理解されて、菩提とは「如実知心」と言われる。それに対するブツダグヒヤの注釈では、それは悟りの自性そのものだとして解釈され直すようになった。

このような密教的な菩提心の展開があると思われるので、菩提心という、後期大乘になって非常に盛んに論じられるようになってくる中心的な課題の中に、仏性とか如来蔵とか *bhāṣṣavara* とか、全てが流れ込んで共通の広場のようになって、密教に引き継がれるのではないかという感じを持っている。

ただ、特に後期密教で問題にされるのは、空の理解がそれで正しいのか、正当な理解をしているのか、それはひょっとしたらヒンドゥー教ではないかということがある。これは、大乘思想の儀軌化というように大乘を主体に見れば、大乘をさまざまなシンボルに置き、大乘思想をシンボル操作でもって体感させるということになるが、外から異質なものがどんどん入ってくる状況があつて、それを仏教的に解釈して実践しないといけないとなったときには、その空性とか *bhāṣṣavara* の理解にも変化が出るだろうと思われる。そのような仏教とそれを取り巻いている歴史的な環境、他のさまざまな宗教思想や実践とのダイナミックな交流みたいなものが作用して、密教史を展開させていくのではないかと考えている。

三、密教儀礼と大乘仏教思想

奥山氏の発表の中で、筆者にとつてもう一点興味深かったのは、「儀軌の大乘思想化」ということである。密教の発展過程における「大乘思想の儀軌化」ということは、松長有慶博士によって提唱され、既に定説になっているが、奥山氏がそれと合わせて述べられたのが、その逆の「儀軌の大乘思想化」であった。大乘仏教に儀軌や儀礼が

加わっていくことによって密教が発展していく。その時、儀礼を自分たちの宗教システムの中に採り込んでいく際に、当然、その宗教的な意味づけをしなくてはならない。すると儀礼に対して何らかの大乗仏教思想としての意味を与えるのであるから、「儀軌の大乗思想化」ということが当然そこで起こってくることになる。

儀式・儀礼の行為それぞれ一つ一つに大乗仏教の意味を付与していくことによって、自分たちの行っている儀礼が、それまでの伝統から見ると異質なものであったとしても、それは実は大乗思想をこういう目に見えるかたちで反映をしているのだという意識に基づいて、密教実践者たちは、自分たちの儀軌や儀礼を複雑化していったということがあるだろう。そのようなことから考えると、奥山氏の提言は非常に重要である。

では本セッションで話題になったヴラタ儀礼の中に、そのように大乗仏教思想を採り込んでいくという意識はどの程度反映されているのか。後期密教の儀礼においても、儀礼の構成要素が大乗の教理としては何を表しているのかという、意味の当てはめを行っているが、ヴラタ儀礼の中でも同じように、儀礼の一つ一つの要素に思想的な意味配当を行っていることがあるのか。この点を佐久間・スダン両氏に再度質問した。

まず佐久間氏の答えは次の様な内容であった。

発表で取り上げた不空羂索観自在の三三昧で曼荼羅が三種用いられるが、その中の特にタイプ2の曼荼羅は、導師が曼荼羅と一体となることによって観想した曼荼羅であり、大慈悲を表す不空羂索観自在の曼荼羅であるが、導師はそれと一体化する。それは単に導師の心の中の世界だけではなくて、目の前にある実際の曼荼羅、あるいはネパール曼荼羅、ネパールのカトマンズ盆地の聖地、そういった実際の世界を重ね合わせることである。

すなわち、仏となって世間を超える。そして、超えた目でもう一度世間を見直すという考え方が見られる。また、ネパールでは、不空羂索観音も含めて、観音は極楽浄土に住んでいるという信仰があり、浄土信仰

との関わりが見られると思われる。

またタイプ4の曼荼羅では、過去仏や、あるいは『悲華經』に登場する観音・勢至の成仏後の仏行も出てくる。すなわち時間という概念が曼荼羅にも入ってきて、はるかな過去からはるかな未来にわたるスパンで衆生を救い取るという幅の広い思想、考え方があって、しかも世界を救う、という考え方が出てくる。浄土信仰や初期仏教の考え方も見られ、いろいろなものを曼荼羅の中に包摂するという考え方が見られるように思われる。

またスタン氏の答えは次の様なものであった。

ネパール仏教では、思想そのものが儀礼の中に反映されているのがよく見られる。今回取り上げた儀礼中でも、三宝曼荼羅では三帰依を表している。本来は「帰依仏・帰依法・帰依僧」という言葉で終わるところが、ネパール仏教では三宝が曼荼羅というかたちで表されている。Buddha 曼荼羅の場合では毘盧遮那をはじめとする九人のブツダ、Dharma 曼荼羅では、それぞれの仏の教えであるということで經典を置く。Sangha 曼荼羅では、観音をはじめとする菩薩を置く。これが、僧侶、在家信者に最も近い存在となっていると考えられる。このように帰依三宝ということを一つ取り上げても、曼荼羅を作ることによってそれを儀礼化し、さらにその意味を深めていくということが、ネパール仏教の中で度々見られるようになっていく。

今回取り上げたヴラタ儀礼の場合では、三宝曼荼羅に続いて根本曼荼羅を作り、さまざまな供物を持って行くが、仏教の思想をその中に反映するかたちでその供物を事細かくそこに止めていくというのが、このヴラタ儀礼の一つの特徴であるかと思われる。

そのようなヴラタ儀礼の意義をさらに説明するために、続いてアヴァダーナを説くが、これも思想をさらに分かりやすく解説するためと思われる。

結 び

以上、各氏の発表と、コメンテーターからの質問に対する各氏からの回答を手短に記した。密教は人間がそのま
まブツダとなるための儀礼を発展させていったが、根底にあるのは人間とブツダとの間に断絶もしくは隔絶を認め
ない人間観であろう。

それがいかなる表現で密教文献に説かれており、時代とともに展開ないし変化していったのか、また、そのよう
な人間観が具体的な密教儀礼の中にどのようなかたちで反映されているのか。さらに、そのような人間観が、現代
社会においていかなる意味を持ち、現代に生きる人々に対する提言となり得るのか。これらを明確にすることが、
「密教から見ると」「人間」定義の「新次元」を考察するに当たっての課題（当然、筆者自身にも課せられている）と言
えるだろう。